

1927(昭和02)年 第二回 縣下中等學校秋季野球大會(主催:いはらき新聞社)

准決勝 1927(昭和02)年09月24日 茨城商業學校グラウンド(茨城)

學校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八
水戸中學	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
茨城商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0

バッテリー:(水戸中)山越/岡部/山越-澤田 (茨城商)矢島/塚田-仲居

一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	合計
0	0	0	0	0	0	0			1
0	0	0	0	0	0	1A			2

(球審:内田 壘審:小泉 高山/開始= 終了=)

	打	得	安	三	四	犠	盗	失
	數	點	打	振	死球	打	壘	策
水戸中學								

	打	得	安	三	四	犠	盗	失
	數	點	打	振	死球	打	壘	策
茨城商業								

計

計

[残壘:]

[残壘:]

本壘打
三壘打
二壘打

試合が動いたのは延長十二回表、水戸中は外岡の二壘打と四球で一死 一 二塁の好機に黒澤が適時打を放って均衡を破った。しかし、本校もすかさずその裏、仲井、矢島、塚田の連続安打で追いついた。十四回には水戸中が二死満塁、本校が一死一、二塁の好機があったが、今度はものにできなかった。その後、水戸中には好機らしい好機はなかったが、本校は十七回二死満塁、十九回二死三塁、二十一回 二、三塁の好機をいづれも得点に結びつけることができず、本校が押し気味のうちに試合は、いよいよ二十五回を迎えた。

二十五回表、水戸中は一死 一、二塁の好機に後続が内野ゴロに抑えられて無得点、その裏 本校は、先頭打者 砂押が四球で出塁、捕逸で二進、さらに三盗に成功して、無死三塁の絶好のチャンスを迎え、次打者 仲居の遊撃強襲安打で決勝点をもぎり取った。

編著者:阿部光博『水戸商野球の百年』2005(平成17)年10月01日 発行より

廿五回戦の思い出

両軍ヘトヘトに疲る 2A対1で水商に凱歌

この昭和二年の九月二十四日には当時の水戸市民に永く語り草として全国野球史に金字塔を刻み込むようなセーセンションが巻き起つた、それは前人未踏の日本野球史に新記録を書き添えた二十五回戦 七時間余にわたる延々の大熱戦記の樹立が水中、水商 両校ナインの敢闘によつてなされたことだ

○夏の県大会が終ると、当時 本社主催の県下中等学校秋季野球大会が新しい抱負にかがやく新人群を集めて九月に、その頃は開かれていた、十数校参加の この秋の大会に結局 勝運の風 満帆に水中、下妻中、龍ヶ崎中、水商の四校が勝ち進んできた、準決勝は水中対水商が水商球場、龍中对下妻中が水高球場でおこない、決勝はこの日のダブルヘッターと決定されていた、さて試合がはじまり龍中对下妻中は龍中に見事なコールドで がい歌が奏されたが、水中対水商が いつまで経つても勝敗がつかず、決勝戦が傾西薄日を思わせる時間の無遠慮な経過に可能か不能かフアンの間でとりざたされてきた。

五時間、六時間と試合は1-1のまま廿回を過ぎ二十五回にと七時間をついやして重ねた、水商は十二回まで矢島が力投 以後は塚田が健投している、この間 十二回目に水中の猛将 黒沢(現稲荷村々長)の三塁打が二塁打だとの水商側 抗議に二時間近く審判 観衆共々に物言いがついて大もめを広げたのも現在のように絶対的に審判の権威を認めなかつた当時としては うたた今昔の骨トウ観があつた、主審の内田氏 塁審は小泉氏(現常銀野球部長) 高山氏の三氏で この黒沢の三塁打が二塁打となつたため水中は二点先取のとこ一点に終つてしまつた、それまで零対零で組合つてエキサイトしていたのでこの一点は水商にとつて相当の痛手かに見えたが 水商 塚田の三塁打に二点を上げ勝敗は逆轉決定したと思つたとたん これまた水中から二塁打なりとの抗議が出 遂に両軍とも同じような抗議にいよいよ試合は きん張し 結局 水商も一点にとどまり同点のまま回をくつていつた、いよいよ二十五回の裏を迎えて水中は疲れた山越に替え岡部をマウンドに送つたが これが致命的な敗因を宿してしまつた、肩のきまらぬ岡部は第一球をノーバンドでバツクネットに達する大暴投に二塁にいた水商走者 砂押(現精麦組合理事)を三進させ 再び山越と替り続く仲居選手の遊匍を水中 加藤名手よく球に追いついたがこれを強襲安打に許してしまい砂押選手ホームインで あつ氣なく2A対1で二十五回の幕を水商の勝利で落してしまつた

新聞「いはらき」1951(昭和26)年11月18日 より

1941(昭和16)年 近畿二府四縣春季中等學校野球大會

第一日 第二試合 1941(昭和16)年04月20日 寺田球場(京都)

學校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八
瀧川中學	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海草中學	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	合計
0	0	0	0	0	0	0			0
0	0	0	0	0	0	1A			1

(球審: 壘審:/開始= 終了=)

	打	得	安	三	四	犠	盗	失		打	得	安	三	四	犠	盗	失
瀧川中學	數	點	打	振	死球	打	壘	策	海草中學	數	點	打	振	死球	打	壘	策
6 尾西	9	0	0					4	8 加納	7	0	1					0
5 喜瀬	8	0	0					1	7 宮崎	8	0	1					0
8 青田	9	0	2					0	4 田中	9	0	3					1
3 芝田	7	0	1					0	1 眞田	10	0	1					0
1 小林	10	0	0					2	3 森本	6	0	0					0
7 田端	9	0	1					0	2 志水	9	0	0					0
4 坂本	8	0	0					1	9 貴志	9	0	0					0
9 二階堂	7	0	0					1	6 南	8	0	1					2
2 高田	9	0	0					1	5 加茂	9	1	2					0

本壘打
三壘打
二壘打

評 至宝別所投手なき本校[同年 春の選抜甲子園大会で左腕を骨折]は、小林投手の巧みなプレートさばきで天下の名投手真田を擁する海草中と四つ相撲を組み、延長25回戦の末 惜しくも敗退した。この記録は数年前[1933(昭和8)年]夏の全国大会で中京対明石が演じた熱戦と同じ長戦の日本記録である。

本校小林投手は豊かな制球力にものをいわせ緩急自在、変化に富む巧みな投球で強打の海草を牛耳り、真田投手と投手戦を展開した。

海草の真田は剛球で9回まで1本の安打も許さず、四球の二走者を出したのみ、しかし、海草の攻撃も振わず9回まで1安打という惨めさであったが、8回本校内野の2失で好機と見えたが暴走で空しく、補回戦に入り海草は、10回本校内野の連続3失に恵まれながら得点をあせてまた拙走で失ひ、それから試合は膠着し、25回の記録を破ると思われたが、25回海草 加納の右安打を野手失策し、安打の加茂生還して決勝のランとなる。本校の敢闘 大いに賞されるべきである。

『滝川野球部史』1986(昭和61)年04月01日 発行より

滝川別所は選抜で負傷のため捕手小林プレートに立ち緩急折りませ好投した。海草は当日 東和歌山出発以来、満員電車で立ちん坊の上、球場到着が遅れ練習不十分のまま試合に臨んだため凡打を繰り返した。廿五回裏、安打に出た加茂弟と加納とのヒット、エンドラン見事成功し 一挙生還、海草 漸く止どめを刺す。尚この日 久邇宮殿下が最後迄御観戦になった。

『和歌山県高等学校野球大会史』1960(昭和35)年02月01日 発行より

1941(昭和16)年 全台湾中等野球大會

第三日 第二試合 1941(昭和16)年07月26日

学校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	合計
台北工業	0	0	0	0	0	0	0	0											0
嘉義農林	0	0	0	0	0	0	0	0											0

(球審: 壘審:/開始= 終了=)

第2試合、台北工業対嘉義農林の試合は、両軍無得点のまま8回に至って降り出した雨は豪雨となり午後3時20分、遂に中止された。

編集・発行:西脇良朋『臺灣中等學校野球史』1996(平成08)年11月吉日 発行より

第四日 第一試合 1941(昭和16)年07月27日

学校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	合計
嘉義農林	0	0	0	0	0	0	0												0
台北工業	0	0	0	0	0	0													0

(球審:三浦 壘審:楠 吉江/開始=13:00 終了=)

昨日8回降雨の為、0-0で引き分けとなった台北工業対嘉義農林の試合は絶好の野球日和の中27日午後1時より(球)三浦(壘)楠、吉江 三審判の下に嘉農先攻で開始された。

7回裏 北工 一死一・三塁の絶好の好機の時、又も降雨の為 再び中止となった。

編集・発行:西脇良朋『臺灣中等學校野球史』1996(平成08)年11月吉日 発行より

第五日 第一試合 1941(昭和16)年07月28日

學校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八
台北工業	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
嘉義農林	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	合計
0	0	0	0	0	0	0			0
0	0	0	0	0	0	1A			1

(球審:三浦 壘審:具志堅 中野/開始=11:02 終了=16:31)

台北工業				嘉義農林			
5	石橋	77	打數 80	6	今久留主		
7	関口	9	安打 12	5	堀田		
4	菊池	3	犠打 5	8	柴田		
8	山口光	3	盗塁 4	1	呉		
1	小助川	15	三振 11	3	洪		
9	山口啓	6	四死球 4	2	佐々田		
6	柳澤	7	失策 1	9	田原		
3	武田	11	残塁 15	7	平田		
2	久保田	1	重殺 1	4	河野		
			本塁打				
			三塁打				
			久保田 二塁打				

熱闘實に廿五回

全台湾中等野球大會はじまつて以來の大熱闘、台北工業對嘉義農林の雌雄を決する日 二十八日、大會第三日廿六日は火花を散らして八回まで無得点、豪雨のためドロンゲームとなつた兩軍は翌二十七日 再び相まみえて決戦を挑んだが またしても雨のため零對零のまゝ七回裏でノーゲーム、豪雨によるやむなき中止とはいへ血の出るやうな この二回の戦闘は事實上の引分けであり、優勝戦以上の熱と熱、鉄と鉄とのひしめき合ひ、血のにじむやうな白熱戦であつた。

悔いなき北工善戦 戦終り兩軍に驟雨沛然

大會第五日二十八日 台北工業對嘉義農林の第三回目の戦は午前十一時二分開始、台北工業 先攻、球審 三浦、壘審 具志堅、中野 三氏で火蓋を切つて落した、台北工業は前日同様 小助川、久保田のバッテリーでのぞめば嘉義農林は佐々田、洪のバッテリーをかへてこの日は一壘手 呉をはじめプレートにたゝせ對峙する、前二回同様全軍の緊張ものすごく劈頭から息詰るやうな力闘を演じ一回、二回兩軍得点なく、三回表 台北工業 二死後 久保田 左前二塁打を打ちはなち つゞく石橋 左翼前に快打を發して久保田生還、實に三日ぶりで殊勲の一点をあげ觀衆どつとたちあがつて喊聲は球場にどよめきわたつた、一点先取された嘉農、四回、五回と必死となつて追ひすがり つひに六回裏 一死後堀田セーフティ・バントに出、嘉農 特有の駿足を利して二盗、三盗に成功、次打者のバントが野選となり堀田生還、嘉農一点をむくひて同点文字通り熱と意氣との大激戦 大接戦はいよく高潮に達した

かくて兩軍 血の滲むやうな投手戦を展開したが つひに九回まで得点なく果して延長戦、十回十一回と回を重ね兩軍文字通りの白熱投手戦、三日間の連闘にもかゝはらず いささかの疲れも見せず さすが南國健兒の強靱さを遺憾なく發揮して つひに二十回を突破、そして二十五回突破の新記録かと思はれたが

二十五回の裏 二死後 嘉農 堀田 遊匍失に出て二盗、三盗、柴田 左翼越し安打で つひに一点を獲得、四時三十一分 五時間二十九分といふ長時間の

激戦の後 嘉義農林に最後の軍配は擧がった、しかし三日間 實に四十回の投球にいさゝかの狂ひも見せなかつた台北工業 小助川投手をはじめ北工の善戦は全く敗れて悔いなきもので試合終了直後 沛然と驟雨いたり 勝利に泣き 敗戦に泣く両軍の頭上に降り注いだ

駿足と強氣

試合評 三浦球審

嘉農は完璧の守備で相手を壓倒し貧打ながら あくまで北工を打捲らうと強氣に食ひ下つたのと、駿足に物をいはせたのが勝因だつた、しかし二十五もの長い間 相手の投手小助川の投球振りを見ながら これにたいしなんらの對策なく終始同じ態度で打つてゐたのはベンチの作戦がまづいといひたい、北工は嘉農の呉投手の最初からカーヴ一点ばかりの投球に對しボックスの位置その他に考慮を拂はなかつたのは嘉農同様ベンチ作戦が拙く、試合が長びいた原因だ、要するに駿足と強氣の打撃は嘉農に榮冠を授けたものとみるべきだらう

天晴れ嘉義農

台北工業 小助川主將 談『運がなかつたといふ他はありません 一同が豫想以上に戦つてくれたので力のかぎりを盡し切つた氣持です、嘉義農林は敵ながら天晴れでした』

夢中の一打！

嘉義農林 柴田主將 談『いまでも勝つたやうな氣持がいたしません あの時は僕がバッターでつぎの球が來たら打つてやろうと夢中で振つたのです、しかし北工の小助川君は回と ともに好調で立派な選手だと思ひました』

「朝日新聞 台灣版」1941(昭和16)年07月29日より

編集・発行:西脇良朋『臺灣中等學校野球史』1996(平成08)年11月吉日 発行より

第30回 全国高等学校野球選手権大会 第一次予選 大分大会

第四日 准優勝戦 第一試合 1948(昭和23)年07月18日 春日浦球場(大分)

学校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
大分二高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
臼杵高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

十九	二十	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	合計
0	0	0	0	0	0	3			3
0	0	0	0	0	0	0			0

(審判:稲田 林 白方 岩崎/開始=12:00 終了=16:25)

	打	得	安	三	四	犠	盜	失		打	得	安	三	四	犠	盜	失
大分二高	數	點	打	振	死球	打	壘	策	臼杵高校	數	點	打	振	死球	打	壘	策
7 工藤	8		0					0	6 土屋	10	0	1					0
5 二宮	11		1					0	5-8浦留	9	0	3					0
2 生野	11		2					0	7 宇都宮	9	0	2					0
1-9山崎	3		0					0	2 金田	10	0	2					1
9-1河原	7		0					0	3 桑原	10	0	1					1
3 馬見塚	8		0				2	0	7-8加藤	9	0	1					0
4 猪股	10		1				2	0	1 田中	9	0	1					0
6 後藤	10		2				0	0	8-9足立	9	0	0					0

計 77 1 12 18 7 5

[残塁:]

計 85 2 13 6 10 1

[残塁:]

本壘打
三壘打
山下 二壘打 山田 小池

【評】和工 対 海南戦は延長二十五回に及び、両軍投手は五時間三十分の間 力投を続け、最後まで崩れなかったが、海南は二十五回裏、安打三本を集中して決勝の一点を挙げた。延長二十五回は県営球場はじまって以来、プロ、高校野球を通じて新記録を立てた。

「朝日新聞 和歌山版」1954(昭和29)年05月06日より

三十三年度 四国地区春季高校野球大会

第二日 決勝 1958(昭和33)年04月28日 高知市営球場(高知)

学校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
高松商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
徳島商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

十九	二十	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	合計
0	0	0	0	0	0	2			2
0	0	0	0	0	0	0			0

(球審:西森 塁審:山崎 石本 永沢/開始=13:00 終了=18:27)

	打	得	安	打	三	四	犠	盗	失
高松商業	数	点	打	点	振	死球	打	塁	策
8 西岡	9	0	1	0	1	0	1	1	0
9 植松	9	1	1	0	3	1	0	1	0
5 岡田紀	10	0	0	0	5	0	0	0	1
2 岡村	9	0	2	1	1	1	0	0	0
3 藤田	7	0	1	0	2	2	0	0	1
1 石川	8	0	0	0	1	0	1	0	1
7 岡田行	4	0	0	0	2	0	0	0	0
7池本	5	0	0	0	3	0	0	0	0
4 渡辺	9	0	0	0	5	0	0	0	0
6 中井	9	1	3	0	3	0	0	0	2
計	79	2	8	1	26	4	2	2	5

[残塁:4]

本壘打
三壘打 岡村

【高知にて二十八日津田記者発】雨で一日順延された三十三年度 四国地区春季高校野球大会 最終日は前日の雨も晴れ上った二十八日午後一時から高知市営球場で高松商対徳島商の決勝が行われた。試合は決勝にふさわしく徳商 板東、高松商 石川 両投手の力投で大会二度目の延長戦に入り、文字通り 両ナイン全力をつくしての攻防で0対0の均衡は容易に崩れず、四国高校球界はじまって以来の二十五回という新記録の熱戦のすえ、徳商ナインの健闘も空しく高松商が2対0で勝ち、三年連続優勝をとげた。

試合は徳商 板東、高松商 石川 両投手の力投で二十五回に及び息詰まる投手戦を展開、右親指の負傷を おして投げつづけた徳商板東投手にも勝運はついにほぼ笑まなかった。0-0で迎えた二十五回表、高松商は無死 中井が中前に安

二壘打 岡村

	打	得	安	打	三	四	犠	盗	失
徳島商業	数	点	打	点	振	死球	打	壘	策
8 梶皮谷	9	0	1	0	0	1	0	1	0
6 大坂	7	0	0	0	2	2	1	0	1
9 富田	9	0	0	0	3	1	0	0	0
3 大野	10	0	0	0	5	0	0	0	0
1 板東	10	0	1	0	2	0	0	0	0
2 大宮	8	0	2	0	3	0	2	2	0
7 佐藤	8	0	0	0	1	2	0	0	0
5 玉置	8	0	1	0	1	1	0	1	0
4 山崎	8	0	0	0	0	0	1	0	1
計	77	0	5	0	17	7	4	4	2

[残壘:13]

本壘打
三壘打
二壘打

打を放ち、つづく西岡の一塁線バントで玉置三塁手が前進して処理したがこのとき三塁ベースはガラあきとなり一塁の中井は一挙に三塁を陥れて決勝機をつかんだ。ここで板東投手はスクイズを警戒して一球、二球とも外角遠くウエストした。つづく第三球のウエストはあまりにも高く大宮捕手のミットをかすめるワイルドピッチとなり中井生還、勝運は徳商からスッと消えてしまった。鉄腕板東投手もさすがに気落ちしてか、つづく植松、岡村に長短打されてさらに1点を許し無念の涙をのんだ。

「徳島新聞」1958(昭和33)年04月29日より

第七回 下松市長旗争奪周東高校野球

1958(昭和33)年05月10日 下松市日石球場(山口)

学校名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
徳山商工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
下松工業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

バッテリー:(徳山)河村-岡崎 (下松)上村-白倉

十九	二十	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	合計
0	0	0	0	0	0	0			0
0	0	0	0	0	0	1A			1

(球審: 壘審:/開始= 終了=)

	打	得	安	三	四	犠	盗	失
徳山商工	数	点	打	振	死球	打	壘	策

	打	得	安	三	四	犠	盗	失
下松工業	数	点	打	振	死球	打	壘	策

計

計

[残塁:]

[残塁:]

本塁打

三塁打

二塁打 玉野

「毎日新聞 山口版(1)」1958(昭和33)年05月11日より

※参考：昭和十七年度 日本野球 春季公式戦

大洋 対 名古屋 第五回戦[大洋 4勝1分] 1941(昭和17)年05月24日 後樂園球場(東京)

チーム	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九
名古屋	0	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大洋	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	合計
0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	4

(球審:島 壘審:澤 池田/開始=14:40 終了=18:27[日没により引き分け])

	打	得	安	打	四	三	刺	補	失	犠	盗
名古屋	数	点	打	点	死球	振	殺	殺	策	打	塁
4 石丸藤	12	0	0	0	0	1	14	11	0	0	0
6 木村進	11	0	2	0	1	2	3	13	3	0	0
8 榊	10	1	2	0	2	0	10	1	0	0	0
9 飯塚達	11	1	1	0	1	2	2	1	0	0	0
2 古川清	11	1	2	2	1	3	9	1	0	0	0
7 吉田和	11	1	2	0	1	1	7	1	0	0	0
3 野口正	11	0	1	0	0	2	32	1	1	0	0
1 西澤	11	0	2	0	0	2	1	4	0	0	0
5 芳賀	11	0	1	1	0	0	6	8	1	0	0
計	99	4	13	3	6	13	84	41	5	0	0

	回	打	安	三	四	自
投手	数	数	打	振	死球	責点
西澤	28	99	15	6	6	3

[残塁:17]

本塁打 古川清(第3号)

三塁打

二塁打 古川清 野口正 西澤 芳賀

	打 數	得 點	安 打	打 點	四 死 球	三 振	刺 殺	補 殺	失 策	犠 打	盜 壘
5 中村信	11	1	2	0	1	1	1	12	0		0
6 濃人	9	0	1	0	1	0	4	8	4		0
9 淺岡	10	0	2	2	2	1	5	2	1		0
1 野口二	12	0	1	0	0	0	1	8	0		0
3 野口明	10	0	1	0	0	0	35	0	0		0
7 村松長	11	1	2	0	0	0	7	0	0		0
4 山川武	2	0	0	0	0	1	3	0	0		0
4 苅田	8	1	3	0	1	0	6	7	1		0
2 佐藤武	11	0	2	1	0	3	17	3	0		0
8 織邊	10	1	1	0	1	0	5	0	0		0
計	94	4	15	3	6	6	84	40	6	3	0

投手	回 數	打 數	安 打	三 振	四 死 球	自 責 點
野口二	28	99	13	13	6	2

[残壘:15]

本壘打

三壘打

二壘打 淺岡 佐藤武

「野球界」第三十二卷 第十二號 1942(昭和17)年06月15日 発行より

編者:ベースボール・マガジン社『日本プロ野球記録大全集』1985(昭和60)年06月15日 発行より

著者:宇佐美徹也『プロ野球記録大鑑』1993(平成05)年08月01日 発行より

発行 2012年05月11日

著者 弘田 正典